中川 純一

## 1.報告概要

以前、Au(111)基板上にCuOEP(銅オクタエチルポルフィリン)-CoTPP(コバルトテトラ キスフェニルポルフィリン)混合膜を再現性よく作製することができなかった。今回、 CuOEP-CoTPP混合膜を再現性よく作製できることを確認した。

同一探針でケルビン測定とバリアハイト測定を行うためには、導電性カンチレバー でのSTM観察が不可欠である。今回、導電性カンチレバー(µmasch社 NSC35/Ti-Pt)を用 いてSTM観察を行った。試料にはAu(111)基板を用いた。観察はJSPM5200を使用し、窒素 雰囲気下で行った。

## 2. 結果

CuOEP、CoTPP溶液を混合し、CuOEP-CoTPP混合溶液を作製した(CuOEP,CoTPP溶液のモル濃度は表1の通りである)。作製した混合溶液をAu(111)基板上に滴下し、混合膜を作 製した。溶媒にはトルエン(Wako 試薬特級 204-01866)を用いた。

CuOEP、CoTPP溶液の混合割合と混合膜の作製結果を表2、3に示す。CuOEP、CoTPP溶液の混合割合がC、Dの場合に混合膜を作製することができた。C,DのときのSTM像を図3,4に示す。

この結果から、CuOEPの濃度が小さいと混合膜を作製することはできないことがわかった。このことから、最初にCuOEPが基板上に吸着し、その後CoTPPが吸着すると考えられる。

	Molar concentration (10 <sup>-3</sup> mol/l)	weight	
CuOEP	0.067	596.31	
CoTPP	0.21	671.65	
CoTPP	0.21	671.65	

表1.CuOEP,CoTPP溶液のモル濃度と分子量





図 1 . CuOEP 図 2 . CoTPP

	Volume of CuOEP (ml)	Volume of CoTPP (ml)	Result	Molar ratio
А	0.7	0.7	×	CuOEP:CoTPP=1:3
В	1.4	0.7	×	CuOEP:CoTPP=1:1.6
С	2.1	0.7		CuOEP:CoTPP=1:1

表2.CuOEP,CoTPP溶液の混合割合と結果

	Volume of CuOEP (ml)	Volume of CoTPP (ml)	Result	Molar ratio
С	2.1	0.7		CuOEP:CoTPP=1:1
D	2.1	1.4		CuOEP:CoTPP=1:3

表3.CuOEP,CoTPP溶液の混合割合と結果

CuOEP-CoTPP/Au(111) Constant current image



/ = 0.7 nA , V = 0.23 V 50 × 50 nm 図3.CuOEP-CoTPP混合膜の STM像(混合割合がCのとき)

CuOEP-CoTPP/Au(111) Constant current image



/ = 0.5 nA , V = 0.28 V 50 × 50 nm 図4.CuOEP-CoTPP混合膜の STM像(混合割合がDのとき)

アセトン+2-プロパノールで洗浄した導電性カンチレバー(図5)を用いてAu(111)基 板のSTM観察を行った。それぞれの探針のバネ定数と長さは表4の通りである。

最もバネ定数の大きいBの探針を用いれば、金のグレインを観察することができた。 しかし、トンネル電流が安定せず、スキャンの途中で急に観察できなくなることがよく あった。

この問題を解決するために、カンチレバーに金を蒸着した(金を20nm蒸着した)。金を 蒸着することにより探針が鋭くなり、トンネル電流が安定すると考えられる。しかしな がら、金蒸着前と同じく、最もバネ定数の大きいBの探針を用いた場合でも安定してSTM 像をとることができなかった。

	А	В	С
Soring constant (N/m)	7.5	14.0	4.5
length (µm)	110	90	130

表4.カンチレバーのバネ定数と探針の長さ

	Soring constant (N/m)	result
С	4.5	×
А	7.5	×
В	14.0	

表5.カンチレバーのバネ定数とSTM観察の結果

## 3.今後の予定

戸部研からもらった分子(図6)のバリアハイト測定

バリアハイト測定でどのようにエネルギーレベルアライメントを 議論できるのかを考える(酸素濃度依存性、基板依存性など)

 $R = C_{10}H_{21}$ 

I length

ABC

umasch社 NSC35/Ti-Pt

図5.使用したカンチレバーの概観図

図6.デヒドロアヌレン